

第13回“鳥人間コンテスト”優勝

浅沼組建築部技術課主任

吉川俊明さん

多感な少年時代、何かのきっかけで、人生に大きな指針が与えられることがある。吉川さんの場合もそうだった。小学生時代、近所の先輩が、ラジコンの模型飛行機を、楽しそうに操縦していた。

大空を自由に飛び回る飛行機を吉川少年は、目を輝かせて見ていた。そんな思いが、模型飛行機づくりを始めさせることになる。

とにかく物を作るのが大好きで、工作の時間が待ち遠しかったという。海外の模型雑誌や、骨組みに最適な材料を南米やカナダから輸入するなどの凝りようで、一日八時間は飛行機作りに当てていたという。「自分でつくったものが、大空をスイスイ舞うのはなんとも気分爽快です」と、その魅力を語る。大学時代にはオランダで開かれたラジコンの世界選手権に、世界最

年少の二十一歳でアクロバット飛行部門に出場した。

小学生のころから将来の仕事は建築家と決めていた吉川さん（三十七歳）は、関西大学工学部卒業後、浅沼組建築部に入社。現在、建築部技術課主任として、多忙な日々を送っている。

さて、模型飛行機づくりを楽しんでいた吉川さんのもとに、ある日悲報が入ってきた。飛行機づくり仲間の一人が“鳥人間コンテスト”の出場を前に、練習中に墜落死したというものだった。大ショックだった吉川さんは、友人の無念をはらすため彼の代わりにコンテストに出場する決心をする。“鳥人間コンテスト”は、七七年から毎年夏に琵琶湖畔で開催されているもので、有人飛行機による飛行距離を競うもの。毎年約千五

百チームの応募があり、

その中から七十チームが選ばれる。毎回テレビを見ながら、あの程度ならいつでも優勝できると気楽に見ていた吉川さん、出場を決めると、会社仲間や友人たちを集め、十五人でチームを編成。チームのメンバーと第十二回大会（八八年）

を見に行き本物を目の前にして、なんとか頑張ったらつくれるという自信を持って帰る。そして、第十三回（八九年）大会の優勝を目指して、今までの模型飛行機づくりから有人飛行機づくりへの挑戦が始まった。

女性パイロット部門（他に滑空機、プロペラ機部門がある）の優勝を目指す吉川さんチーム、まずはパイロットの選定である。性格的に根性があり、体重が軽いと言



飛行前の打ち合わせをする吉川さんと

パイロットの宮崎祥代さん

うのが必要条件である。最初にアタックした女性は両親の強い反対で断念。次に挑戦したのが同じ課で入社二年目、コンピュターで図面を描いている宮崎祥代さん（二十一歳）であった。

「旅客機にも乗ったことがなかったし、ジェットコースターも嫌いだだったのでとても無理だと思っただんですが、吉川さんの説得力に負けました」と語る宮崎さんは、体重が四十二キロと小柄だが、なかなか度胸満点の女性である。

飛行機づくりでは、木工や接着剤の関係で冬場が最適とされている十一月からスタート。設計は、さすがに模型飛行機歴二十五年とあっておてのもの。しかし今回は人を乗せるため、材料試験を何度



優勝を果たした GHicK-235 の勇士

も繰り返し、決して空中分解のないように、安全面には万全を期した。

製作場所は、両親との二世帯住宅である吉川宅。もちろん設計は自分でしたとあって、製作場所に早変わりするような(?)部屋が何部屋かあって、そこには、製作中の飛行機の部品が置かれていた。平日は必ず二、三時間はコツコツ一人で製作する。休日には、チーム総動員で一日中、吉川さんの設計図をもとに奮闘する。それを繰り返し、七か月掛かってやっと五月に完成。

翼幅十九メートルの全翼トラス組みの美しい鳥の誕生である。その名は宮崎パイロットが『CHicK 235』と名付けた。CHicKとはヒヨコという意味だ。

完成の喜びもつかの間、これほどのようにして会場に運び込むか。これは製作よりもやっかいである。大会前日に四トントラックを用意して、飛行機を分解して会場に運ぶ。

「あのときのハラハラといったらありませんでした。スタート台は百八十メートルの沖合。高さ十メートルの位置からで当日は追い

風もあり、チームの息が合っていないければ、せつかくの飛行機もそこへ行くまでに翼が変形したり、折れたりしてしまいます。もう記録以前の問題ですからね」と、テレビに映る華やかさとは裏腹に、スタートするまでの苦労を実感した。

いよいよ吉川さんの設計した『CHicK 235』がスタート。風速三メートル毎秒の追い風の中、全速で離陸、無線で指示を送る吉川さん。四十五度で降下、美しい翼はスイスイ記録を伸ばし、今大会(第十三回)最高の二百二十五・九メートル、日本歴代二位の記録で優勝を飾った。

「この七か月は苦しいことばかりでした。でも優勝が決まった瞬間、もう来年のことを考えていました」と、自分でもあきれたという。また、「夢を果たせず死んでいった友人のはなむけになりました」とも。

“鳥人間コンテスト”にかかった費用は二百万円(材料費百万円、運搬その他百万円)。会社からの援

助とメンバーで出し合った百万円と優勝賞金の百万円でまかなった。昨年は、台風で風が強くと見送ったが、今年も優勝目指してメンバーと奮闘中だ。

建築と飛行機づくり、うまく生かしているという。「なにより仕事、家庭、飛行機づくり、この三つのバランスを大切にしています」と言う吉川さんだが、そこには奥様の深い理解があるようだ。

飛行機づくりはなんとといっても体力が必要。健康そうに見える吉川さんであるが、三十一歳の時過労が原因で脳血栓で倒れ、左半身不随に。

一年間のリハビリで復帰。リハビリ中も絶対大丈夫!と言い聞かせ、落ち込まなかったと言う。その時の後遺症で今も左半身の痛感、温感がないという。

「とにかく飛行機が大好きなんです。飛行機づくりは生涯続けて行きたいですね」と、吉川さんのフリータイムは、大空に夢を乗せてどこまでも飛ばし続ける。

(田中美智子)